

第3節 1980～1990年代の学生の意識

本節では、学生の意識をみていきたい。しかしこのための意識調査を行ったわけでもなく、また、もし行ったとしても、分かるのはやはり平均的なものになってしまう。したがって本節で論じる学生の意識は、限られた資料から構成されたものであることを最初に述べておきたい。

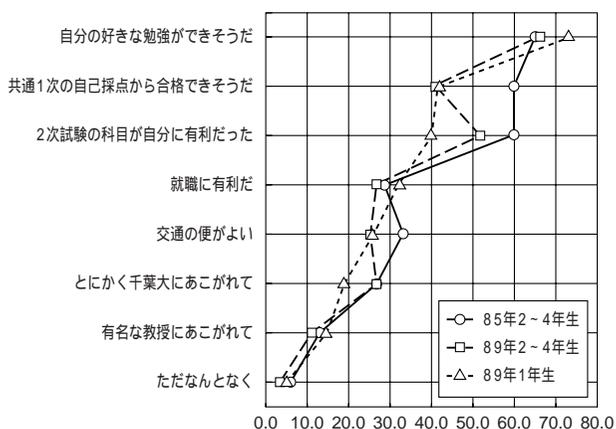
第1項 千葉大学への入学

図1 5 21 aは、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した学部・学科の受験理由である。これによると、学部・学科の受験理由の1位は「自分の好きな勉強ができそう」であった。とくに1989年の1年生では73.0%がこれを理由にしている（1985年の2～4年生は65.6%、1989年の2～4年生は66.3%）。

1985年の2～4年生では、これに「2次試験の科目が自分に有利だった」（60.3%）と「共通1次の自己採点から合格できそうだった」（59.9%）がつづく。しかし1989年の2～4年生になると、この2つは相対的に低くなっている（51.6%と40.9%）。とくに1989年の1年生では後者は2～4年生と変わらないが（41.4%）前者も40%未満になっている（39.9%）。

このような変化の原因は2つ考えられる。第1に入学者選抜方法の変化があげられる。1987年から、共通1次試験の試験科目が5教科7科目から5教科5科目に減った。また同年に「連続方式」が導入され、受験者が2校あるいは3校を受験できるようになった。これらのことから「輪切り」による受験体制がわずかではあるが緩和さ

図1 5 21 a 学部・学科の受験理由（単位：％）



第3節 1980～1990年代の学生の意識

れたのであろう。

図1 5 21bは、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した、千葉大生の合格の満足度である。これによると、学生の千葉大合格の満足度はかなり高い。また親の満足度は学生の満足度を上まわっている。

1985年の「とても満足」と「かなり満足」の合計は54.1%で「少し満足」と「全然満足しない」の合計16.6%を大きく上まわっている。1989年にはそれがさらに増加し、「とても満足」と「かなり満足」の合計は65.0%、「少し満足」と「全然満足しない」の合計は10.9%であった。

親の満足度はさらに高く、1985年では、「とても満足」と「かなり満足」の合計は66.2%で「少し満足」と「全然満足しない」の合計9.7%を大きく上まわっている。1989年ではそれがさらに増加し、「とても満足」と「かなり満足」の合計は73.0%、「少し満足」と「全然満足しない」の合

図1 5 21b 合格の満足度(単位: %)

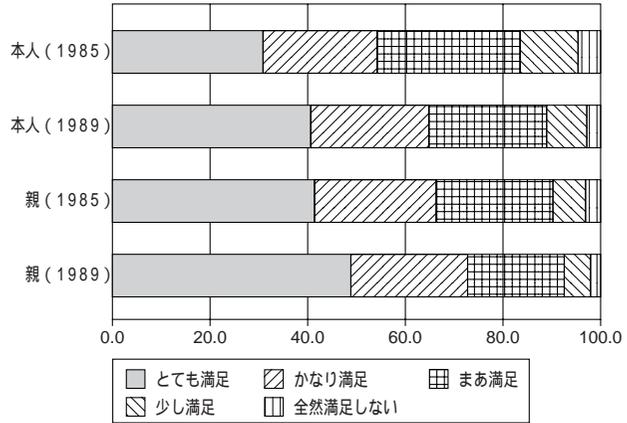
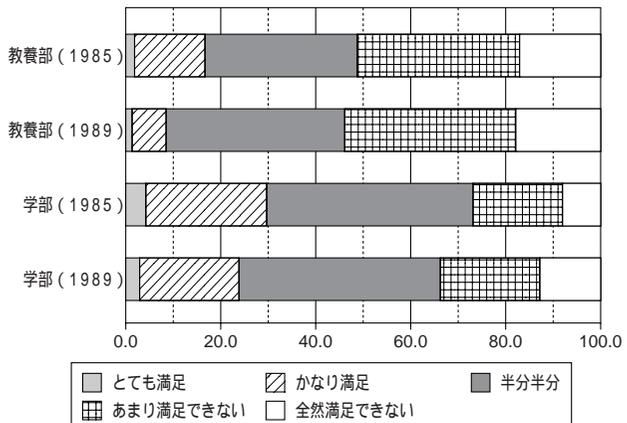


写真1 5 3 合格者発表(教育学部1998年3月)

図1 5 21c 授業の満足度(単位: %)

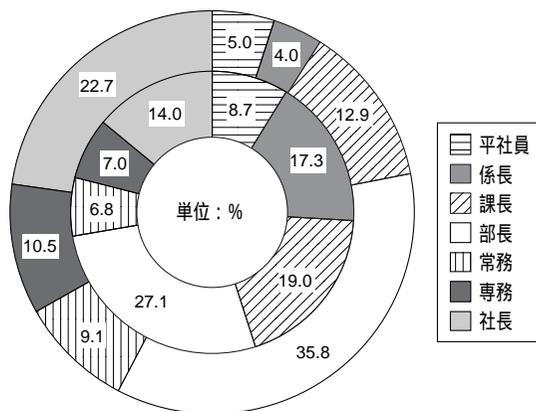


計はわずか7.0%であった。

ところで、図1 5 21cは、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した、授業の満足度である。合格の満足度は高かったが、授業の満足度は低く、しかも1985年よりも1989年のほうがより低くなっている。1985年の学部授業では、「とても満足」と「かなり満足」の合計が29.8%であるのに対して、「あまり満足できない」と「全然満足できない」の合計が26.6%であった。それが1989年になると、「とても満足」と「かなり満足」の合計が24.3%に減り、「あまり満足できない」と「全然満足できない」の合計が34.0%に増えた。教養部の授業ではさらに満足度が低い。1985年では、「とても満足」と「かなり満足」の合計が16.6%で学部より低く、「あまり満足できない」と「全然満足できない」の合計が51.1%で学部より高かった。それが1989年になると、「とても満足」と「かなり満足」の合計が8.6%に半減し、「あまり満足できない」と「全然満足できない」の合計が53.5%に増えた。いずれにしても授業の満足度は低くなっている。

また、図1 5 21dは、1985年と1989年の『千葉大生白書』でしらべた、将来の定年時の地位の予測である（男子学生のみ）。それによると、1985年では、平社員は8.7%、部長・課長・係長といった管理職が63.4%、社長・専務・常務といった取締役が27.8%であった。1989年では、平社員が5.0%、管理職が52.7%と減少したのに対して、取締役は42.3%と増えていた。1989年といえば、「バ

図1 5 21d 将来像（内側：1985年 / 外側：1989年 単位：%）



ブル経済」の絶頂期であり、それが反映しているのだろうか。

以上のことをまとめると、つぎのようになる。学部・学科の受験理由は「自分の好きな勉強ができそうだ」がもっとも多かった。千葉大合格の満足度はかなり高く、親の満足度は学生の満足度を上まわっていた。しかし授業の満足度は低く、1985年よりも1989年のほうがより低くなっていた。ところが自分の将来像は、バブル経済の絶頂期とはいえ、1985年よりも1989年の方が明るくなっていた。

第2項 千葉大生のアイデンティティ

(1) 千葉大生の自己イメージと実態

千葉大生の自己イメージについては1985年の、実態については1985年と1989年の『千葉大生白書』に調査がある。それを示したのが図1 5 22 aと図1 5 22 bである。このうちイメージと実態の対比可能な1985年をみてみよう。イメージの「とても多い」と「かなり多い」の合計と、実態を比べてみると、「ディスクに1度も行ったことがない」と「車を持っている」を除くと、他ではすべてイメージのほうが実態よりも高い数値を示していた。

また実態を1985年と1989年の2～4年生で比べてみると、「ジーンズとトレーナーを身につけている」、「1コマの授業でも欠かさず出席する」、「ディスクに1度も行ったことがない」が1割ほど増えている。

(2) 千葉大生のプライド

千葉大生であることに学生はプライドを持っているのか。1985年と1989年の『千葉大生白書』は、「自分が千葉大生である」ことをいうときの気持ちを、A「親戚や知人

図1 5 22 a 千葉大生の自己イメージ (1985年 単位: %)

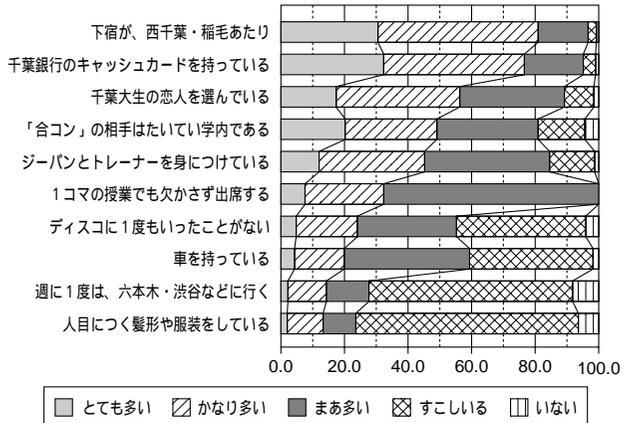
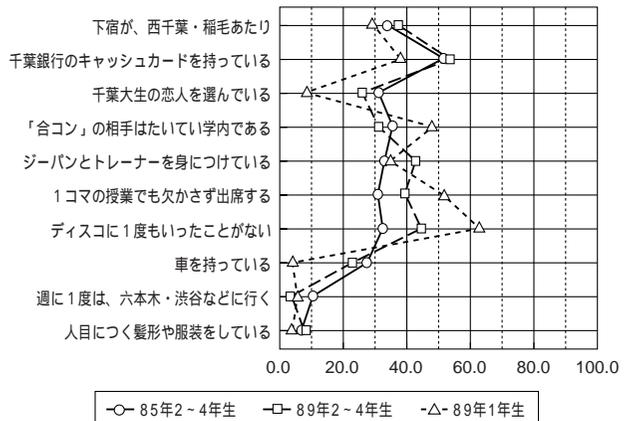
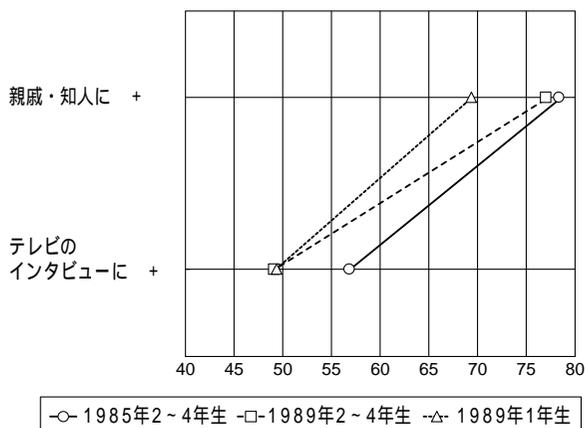


図1 5 22 b 千葉大生の実態 (単位: %)



にいうとき」、B「東京の有名私立大にっている友人にいうとき」、C「街頭でテレビのインタビューに答えるとき」の3つにわけ
て尋ねている。そしてその回答に、①「どんなもんだい!」、②「まあ、こんなところでしょう」、③「恥ずかしながら千葉大です」、
④「首を絞められても言いたくない」、⑤「某国立大

図1 5 23 千葉大生のプライド(単位: %)



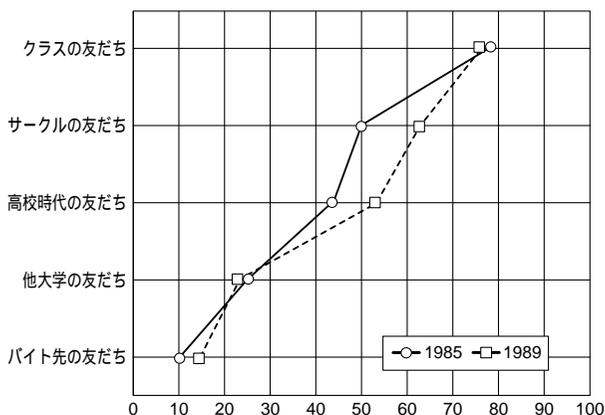
学です、と言いたい」の5つを用意した。図1 5 23は、このうち、AとBの場合で、①と②の合計を示したものである。これによると、親戚や知人にいうときは70~80%であるのに、街頭のテレビ・インタビューだと50~60%に減ってしまう。とくに1989年だと50%を割っている。どうも千葉大生であることに誇りを持つ者が減少しているようである。

第3項 学生間の人間関係

(1) クラスメイトとの交流欲求

1985年と1989年の『千葉大生白書』は、友だちはどのような人が、という調査を行った(図1 5 24a)。それによると、どちらもクラスの友だちがもっとも多く、ついでサークルの友だち、高校時代の友だち、他大学の友だち、アルバイト先の友だちの順であっ

図1 5 24a 友だち(千葉大生白書 単位: %)



第3節 1980～1990年代の学生の意識

た。サークルの友だちと高校時代の友だちが、1985年よりも1989年のほうが、それぞれ12%と10%増えている。

『大学生生活実態調査』でも同様の調査を行っている(図1 5 24b)。これによると、現在のクラスの友だち、小中高校時代の友だち、学内サークルの友だち、教養時のクラスの友だち、アルバイト先の友だちの順であった。ただアルバイト先の友だちは、1983・86・93年と増加してきた。

図1 5 24cは、1985年の『千葉大生白書』で調査した、友だちとの話題の中心である。それによると、遊びの計画がもっとも多く、ついで異性やその交際の話が多かった。政治や社会の話は19.3%にすぎない。

図1 5 24dは、1989年の『千葉大生白書』で調査したクラスメイトとの交流欲求である。これによると、「出会ったらあいさつぐらいはしたい」(77.0%)、「名前と顔ぐらい一致できるようになりたい」(73.9%)、「クラスの名簿はつくりたい」(69.9%)、「卒業後もつきあいたい」(64.8%)、「みんなでそろって卒業したい」(55.9%)では、「とても思う」と「かなり思う」の合計が50%をこえている。しかし、「試験のとき助けてあげたい」(44.8%)、「コンパは全員でやりたい」(25.0%)では、50%未満となり、「年に一度クラス合宿したい」(18.8%)、「たいていの人出身高校ぐらいは知りたい」(18.0%)、「クラスの人を決定的な秘密をにぎりしたい」

図1 5 24b 友だち(大学生生活実態調査 単位:%)

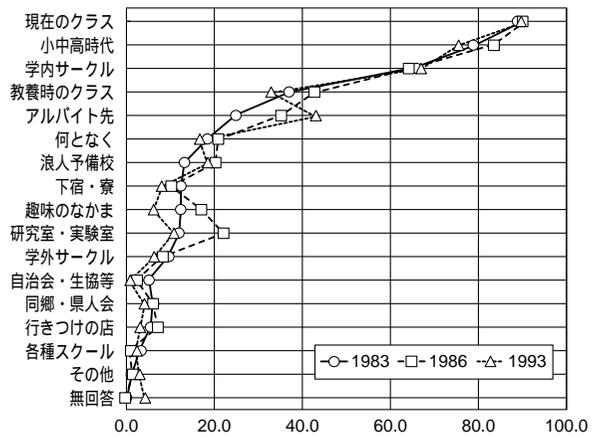
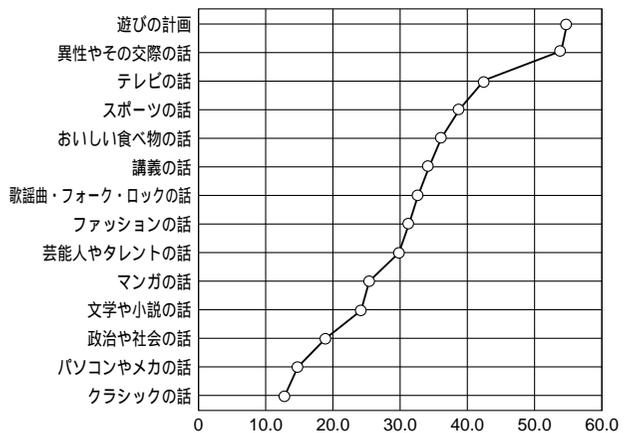


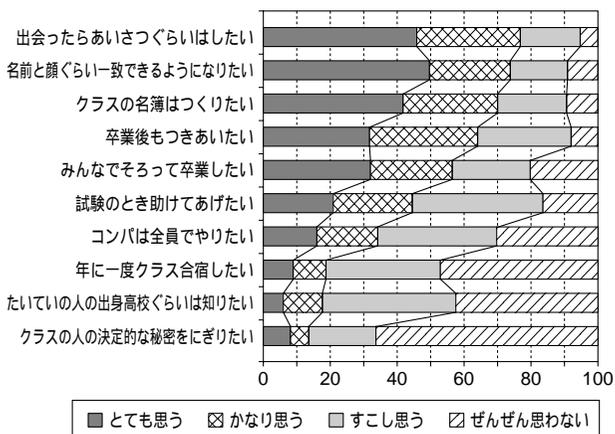
図1 5 24c 友だちとの話題の中心(1985年 単位:%)



(13.3%)では、20%未満となる。

特に20%未満となったのは、クラスメイトのプライバシーにかかわるものである。千葉大生は、クラスメイトのプライバシーに立ち入ってまでの交流を望んではいないといえることができる。

図1 5 24d クラスメイトとの交流欲求(1989年 単位:%)



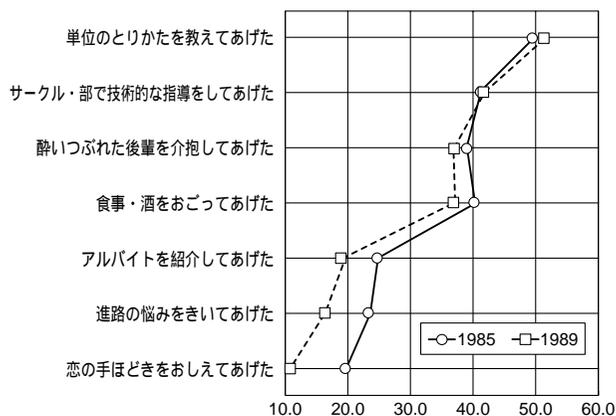
(2) 先輩 後輩関係

千葉大生の「先輩と後輩との親密度」を1985年の『千葉大生白書』と1989年の『千葉大生白書』をもとに、比較してみる(図1 5 25)。

「単位のとり方を教えてあげた」は50.0%から51.3%に、「サークル・部で、技術的な指導をしてあげた」も41.9%から42.1%に微増している。

「酔いつぶれた後輩を介抱してあげた」は39.2%から37.0%に、「食事・酒をおごってあげた」も40.3%から37.1%に微減している。親密度があまり高くないものでは、ほとんど変化がみられない。しかし、「アルバイトを紹介してあげた」は24.7%から19.8%に、「進路の悩みをきいてあげた」は23.6%から16.6%に、「恋の手ほどきをおしえてあげた」は20.0%から11.2%に減少している。親密度が高いものほど、1985年でも数値が低く、1989年になるとそれがさらに低下している。

図1 5 25 先輩行動(とても+わりと 単位:%)



(3) 「一気飲み」問題

一方で「先輩と後輩の親密度」が低下しているのに対して、他方でそれを強要する動きがある。いわゆる「一気飲み」問題である。

本学の一部の学寮では、新生に対し大量の飲酒を強要する悪習が繰り返されてきた。1994年、学生部と厚生補導委員会・学寮部会はこの因習の廃止に乗り出し、寮の伝統と自治を盾に学生部の介入に抵抗しようとする一部学生をねばり強く説得した。その上で、飲酒の強要、とくにいわゆる「一気飲み」は生命の危険を招く蛮行であり、法的にも処罰の対象となりうることを指摘して、飲酒の強要・一気飲みの強制の事実が判明した場合は、加害者の寮生、およびこれを寮行事として実施した寮役員に対して、厳重な処分（退寮命令を含む）を課する態度で臨むことを、告示により通達した。度重なる告示にもかかわらず、この悪習はなかなか一掃されるにいたらず、以後毎年のように指導が繰り返された。

ところが、1996年には、不幸にもあるサークルの新生歓迎行事に際して、1人の学生が急性アルコール中毒により死亡するという事態が生じた。この際には上級生による飲酒の強要が行われたとはいえませんが、学生たちに飲酒の危険に対する認識が十分でなかった点が、大学による指導上の問題として指摘されなければならない。

第4項 政治意識

図1 5 26 aは、1985年の『千葉大生白書』で調査した、政治への満足度である。「とても+かなり満足」が25.9%、「半分半分」が39.1%、「あまり+ぜんぜん満足していない」が35.0%であった。

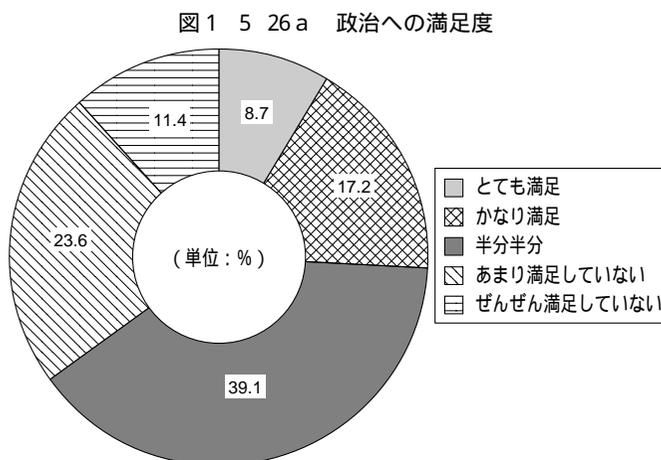


図1 5 26 bは、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した、憲法についての意識である。「天皇の国家元首化」、「徴兵制の復活」、「言論の自由の制限」、「男女平等をやめる」、「大統領制の導入」の5項目について反対の意思表示を示している。1985年では、「大統領制の導入」を除いて、7割をこえており、日本国憲法は千葉大生に浸透しているといえる。1989年では、「天皇の国家元首化」と「大統領制の導入」を除いてすべて1985年を上まわっている。1989年といえば、昭和天皇が亡くなり、「大葬の礼」が問題となった年であったので、それを反映しているのであろう。「大統領制の導入」については、1985年でも反対は過半数に満たず(45.4%)、1989年には3分の1(32.2%)に減っていた。

図1 5 26 b 憲法について、つぎの項目に反対(単位:%)

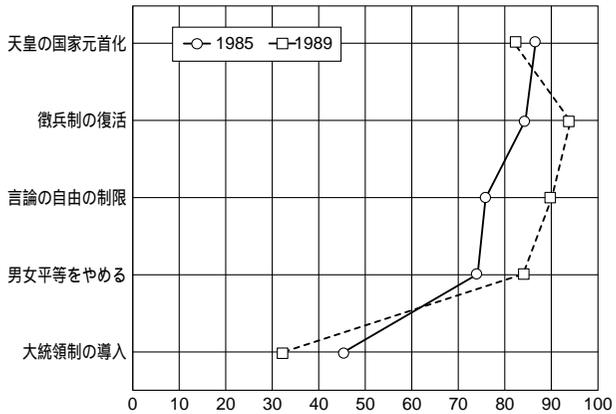


図1 5 26 c 政党支持

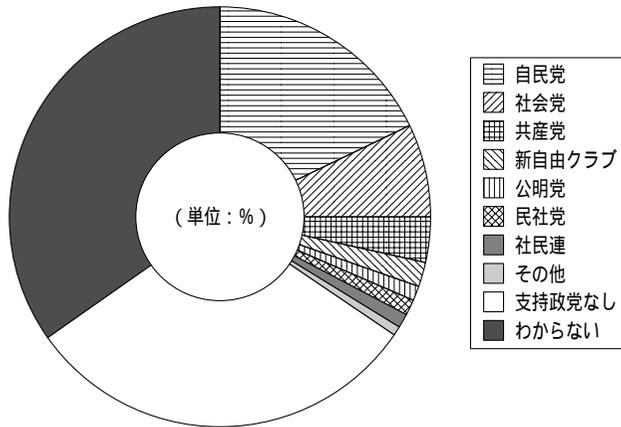


図1 5 26 cは、1985年の『千葉大生白書』で調査した、政党支持である。なんと「わからない」が1位(35.0%)、「支持政党なし」が2位(30.9%)であった(支持政党計は34.7%)。支持政党では、自民党が絶対支持率(全調査結果に占める割合)18.0%、相対支持率(支持政党計に占める割合)51.9%でトップであった。ついで社会党(絶対7.2%、相対20.7%)、共産党(絶対3.5%、相対10.1%)、新自由クラブ(絶対1.9%、相対5.5%)、公明党(絶対1.2%、相対3.5%)、民社党と社民連(ともに絶対1.1%、相対3.2%)の順であった(その他、絶対0.7%、相対2.0%)。

第3節 1980～1990年代の学生の意識

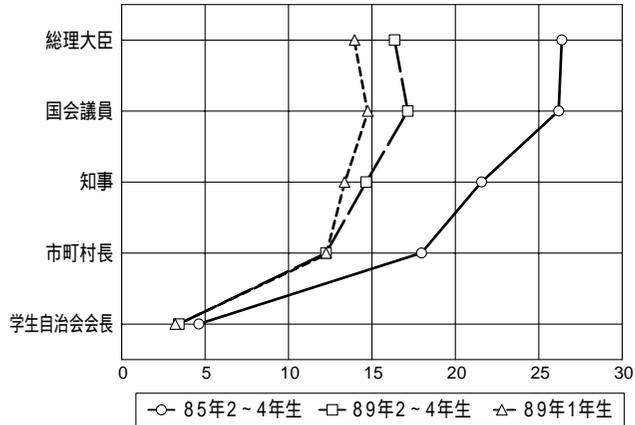
東京大学での学生の支持政党で自民党が1位になったのが1978年であり、若者の保守化が問題となっから久しい。中曽根内閣のもとで「戦後政治の総決算」がとなえられ、保守化がすすんでいた。翌1986年7月の衆参ダブル選挙で自民党が大勝し、300議席を獲得したことを考えると、この数字も驚くことではない。

図1 5 26dは、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した、学生の立候補意欲である。1985年の2～4年生では、総理大臣26.4%、国会議員26.2%、知事21.6%、市町村長18.0%、学生自治会長4.7%で、学生自治会長がもっとも立候補意欲が低かった。

1989年になると、ますます立候補意欲は減退し、2～4年生では総理大臣16.4%、国会議員17.2%、知事14.7%、市町村長12.3%、学生自治会長3.5%であり、1年生にいたっては総理大臣14.0%、国会議員14.8%、知事13.4%、市町村長12.3%、学生自治会長3.3%であった。身近なもの（学生自治会長）ほど低いのが特徴である。

千葉大生の政治意識をまとめると、今の政治に満足していないが、自分が政治に参加するのはいやだ、という「お客様」意識と、憲法改正には反対だが、憲法改正を党の綱領にかかげてきた自民党中心の政治が変わるのもいやだ、という「保守」意識になる。このような意識は、この時期の本学学生だけのものではなく、現在の若者に共通するものである。

図1 5 26d 立候補意欲（単位：％）



第5項 社会運動への関心と参加意欲

(1) 反核・平和運動

図1 5 27aは、『学生生活実態調査』で調べた、反核・平和運動への関心である。関心が「ある」と答えた学生は、1986年の23.7%から増え、1990年には37.4%に達した。しかし、その後は減少し、1994年は26.4%である。一方、関心が「ない」と

答えた学生は、1986年の22.6%から減少し、1989年には9.9%になった。しかし、その後は増加し、1994年は15.2%である。

図1 5 27bは、同じ調査による、反核・平和運動への今後の参加である。「積極的に参加」と「機会があれば参加」の合計は、1982年は34.1%であったが、その後は減少し、1986年に8.3%になってしまう。その後は増加し、1990年に25.3%となるが、再び減少し、1992年は16.2%であった。「映画（・資料）のみ参加」は、1982年には25.1%であったが、「積極的+機会があれば」が減少するにしたがって増

加し、1984～1985年は35.4%に達した。しかし、1986年に激減して14.1%となり、その後再び増加して、1989年に25.3%となった。その後は再び減少して、1992年には17.4%となった。それに対して「参加しない」は、1982年には28.5%だったが、増加して1986年には65.0%に達した。その後は減少し、1989年に35.4%となったが、再び増加して1992年には41.4%となった。

こうしてみると、反核・平和運動への関心と参加意欲は、1986年あたりがもっとも低く、1990年前後がもっとも高い。1986年といえばチェルノブイリ原子力発電所の事故が発生した年であり、それまで低下しつつあった反核・平和運動への関心と参加意欲が増加したのかもしれない。また1989年末は、「東欧革命」が起きて東欧の社会主

図1 5 27 a 反核・平和運動への関心（単位：％）

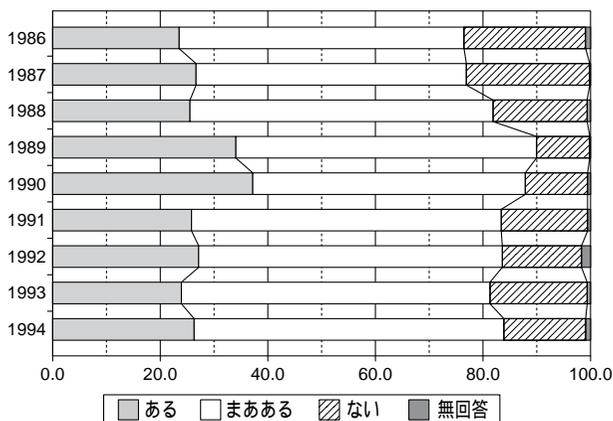
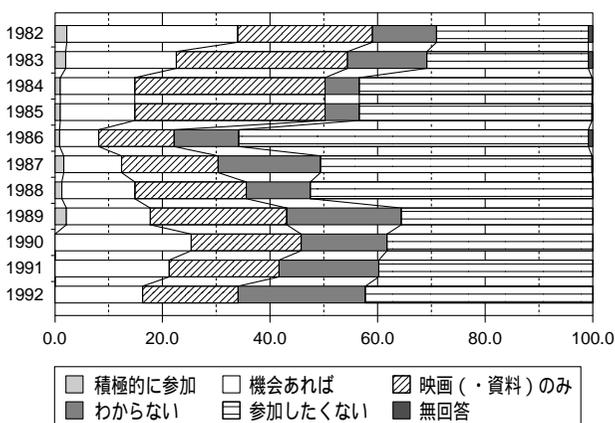


図1 5 27 b 今後の反核・平和運動への参加（単位：％）



第3節 1980～1990年代の学生の意識

義政権が倒れ、マルタでの米ソ首脳会議が開かれて「冷戦の終結」が宣言された年であった。このため、反核・平和運動への関心と参加意欲が低下したのではないだろうか。

(2) 環境問題

環境問題への関心は、1990年からしか調査されていないが、前記の反戦・平和運動への関心と比べるとはるかに高い。図1 5 28 aは、『学生生活実態調査』で調べた、環境問題への関心である。これによると、環境問題への関心が「大いにある」と「まあある」の合計は90%ちかくあった。「ある」の合計は1990年が91.0%と最も高く、1992年が86.8%でもっとも低い。それに対して「あまりない」と「まったくない」の合計は10%くらいであった。

図1 5 28 bは、同じ調査による、どのような環境問題に関心があるかである。これによると、

半数以上が関心があると答えたのは、1990年と1992年の両方で、フロンガス（オゾン層破壊）地球の温暖化、森林破壊、ゴミ問題の4つであった。しかし全体的には1992年は関心が低くなっており、特に原子力発電所（放射性物質汚染）の比率がとくに減っていた。これも「冷戦の終結」に係るのであろうか。

図1 5 28 cは、同じ調査による、1991年の環境問題への取り組みである。これに

図1 5 28 a 環境問題への関心（単位：％）

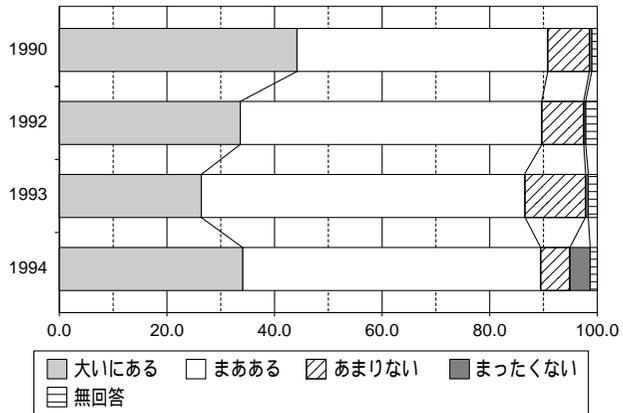
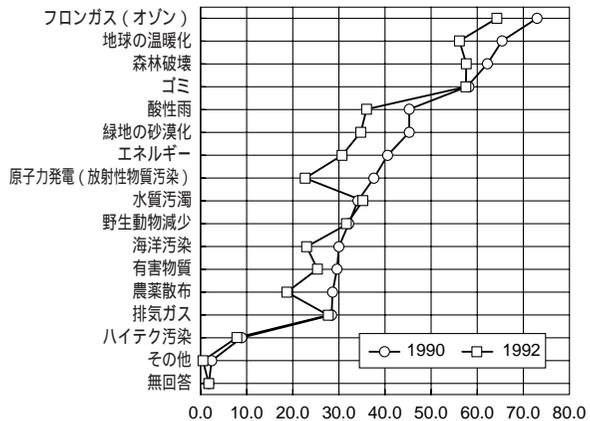
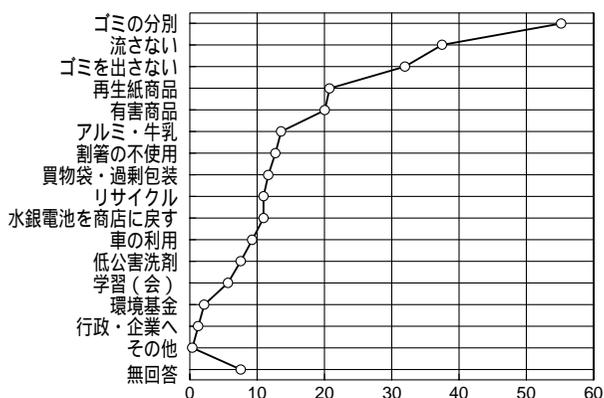


図1 5 28 b どんな環境問題に関心があるのか（単位：％）



よると、ゴミの分別（55.2%）、（汚染物質を）流さない（37.5%）、ゴミを出さない（32.0%）とつづいている。関心が「ある」の合計が90%ちかくあったことを考えると、実行するのは難しいということなのであろう。それでも、取り組みが容易なせいか、反核・平和運動よりも取り組みはよいと思える。

図1 5 28c 環境問題への取り組み（1991年 単位：%）



第6項 大学祭パンフレットに現われた学生の意識

千葉大学祭は、1963年にはじまる。西千葉地区への大学の統合がすすみつつあるなかで、それまでの稲毛祭を継承発展させるかたちで、この年に第1回の千葉大学祭が実施されてから、毎年、学生の手による年中最大の行事として定着している。



写真1 5 4 第36回千葉大学祭（1998年11月）

1983年、第20回千葉大学祭の冊子にその「20年の歩み」が簡単にまとめられている。これに

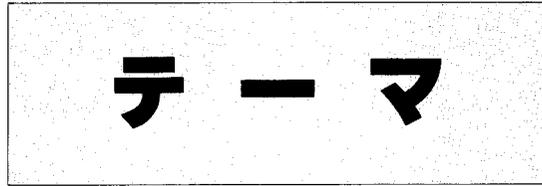
よると、すでに1967年第5回当時には、千葉大学祭 = 模擬店祭との世評が一般的になったという。それでも、1966年第4回以降学生からの公募によって決められるようになった大学祭の「テーマ」は、「はねかえそう！我らの団結の力で」（1968年第6回）「築け自治と民主の砦を学問の自由を守る真摯な人間像を」（1969年第7回）さらに「仲間よ！嵐の中に立て戦争への道に立ちふさがれ」（1971年第9回）など、時

第3節 1980～1990年代の学生の意識

代の政治状況を意識した言葉が躍っていた。

そのような政治色は年を追って薄れてはいくのだが、それでも、1980年、第18回「しらけてないぞ、我等の未来を切り拓け!!」に見られるように、「1980年代 困難に敢然として立ち向かい、それと不屈にたたかいぬきさえすれば、希望を切りひらける時代」といった全学連のスローガンをかけるところからして、学生運動のなごりがまだ色濃く残っていた。自分たちの時代を第2の反動攻勢期

図1 5 29a 1980年の大学祭パンフレット



しらけてないぞ
我等の未来を
切り拓け!!

sub 今この時高らかにかざせ学術文化の火を——未来に向けて

図1 5 29b 1995年の大学祭パンフレット



と位置づけ、大学祭を自分たちの未来の展望を示す場として考えようとしているところもうかがえる。この頃にはまだ、大学祭のマスコットというようなものはなく、冊子の装丁も凝ったものではなく、「祭」の一字で味気ないものになっている。中身もレイアウトを重視するより内容に力を入れていることがうかがえる。

1985年になると、変化はかなり鮮明にあらわれる。第23回大学祭は、「内なるリズムを音にして」とのテーマをかかげ、冊子冒頭で学園紛争は過去のものとはっきり宣言している。しかし同時に、国立大学の学生が共通1次世代と呼ばれ、個性にとぼしく、自己表現に消極的な人間が多いとの世評に反発しつつ、なにか行動していこうという意欲は見えてとることができる。積極的に他者と触れ合いながら自分の考えを修正し、内なる個性のリズムを大学祭で音（音楽）として表現していこうという意欲のあらわれなのだろうか。音という感性に訴える点に、それまでとはちがった特徴がある。冊子の構成・内容にも新たな工夫がこらされ、冊子上でのシンポジウムなどが登場する。さらに冊子の空きスペースに「はみだし大学の音」という学生の声を載せるスペースができ、一般学生からの投稿が掲載されるようになる。これは情報雑誌『ぴあ』の模倣であろうか。第20回からは、大学祭マスコットも新たに登場してくる。

1990年第28回になると、テーマは「動きだせ！」というなんとも抽象的なものになる。傍観者から主役に動きだそうとのアピールではあるが、その内容よりもむしろ、そのインパクトが重視されるようになる。冊子上でのテーマの文字が異常なほど大きいのが目につく。マスコット「まっちゃん」が、テーマ・アピールを説明するページ内に描かれており、以後もくりかえし登場する。冊子の空きスペースでの企画は、この年も継承され、「はみだし性格判断」がとりあげられている。

1995年、第33回になると、テーマは「稀な味がします」と、謳い文句が感覚的に強調されている。構内の様子や催し、テーマ・アピールを、マスコット「けるりーた&けるりーて」の2匹のカエルが、マンガのなかで紹介するという形式を取っている。稀な大学祭ということで、本部企画も超能力を取り上げたり、推理劇を仕掛けて観客にトリックや犯人を推理させる参加型の演劇をやったりと変わった企画が増えてきている。冊子自体がまるでちょっとした商業雑誌のように凝ったものになっている。

おわりに

第5章を終えるにあたって、本学の学生生活を、まとめてみたい。まず、第2節であつかった学生生活の物質的側面であるが、それはつぎのようになる。

まず、学生の収入と収支をみると、自宅外生の住居費と、学費の増大がめだつ。自

第3節 1980～1990年代の学生の意識

宅外生の住居費は、1982年と比べると、1994年には2.5倍以上になった。また学費については、1980年と比べると、1997年には、授業料が3倍以上、入学金は4.5倍にもなっている。このほとんどが親の負担となるのであるから、千葉大生の親はたいへんである。

自宅外生の住居については、いわゆる下宿が減少し、アパート・マンションが増えている。また、部屋の広さは、4畳半は減少し、6畳が増えている。学生の部屋は居住環境は改善されているといえるだろう。しかし、これが結果的には住居費を引き上げ、親の負担を増加させているのである。

部屋にあるモノ、持ちモノなどは、1980年代にはあまり大きな変化はないようである。しかし1990年代になると、学生が、携帯用の音楽メディア再生装置や、携帯電話などを持ち歩くようになったので、部屋にあるモノ、持ちモノも大きく変化していることだろう。

学生の読書時間と書籍購入金額は、どちらも減少している。1日の読書時間は、1980年代はじめの45分から、1990年には30分になってしまった。また1ヵ月の書籍購入金額も、1980年代のはじめの3,000円台から90年には1,500円を割ってしまった。1990年代には2,000円台に回復しているが、これに対して、雑誌、とくにマンガはよく読まれているようである。

テレビについては、2位にニュースが入っているものの、お笑い番組が1位、ドラマが3位であった。学生は、テレビからも影響を受けており、お笑い番組やドラマがよく見られているのはやや問題ありというところであろうか。

課外活動については、学生の10人に6～7人が体育会やサークルに属している。1980～1990年代をとおして、体育会に属する学生は漸減しており、代わって、体育会系サークルが1980年代に急増し、その後もその人数を保っている。

つづいて、第3節の1980～1990年代の学生の意識であるが、それはつぎのようになる。

1980年代の千葉大生の実態は地味であるといえる。1980年代といえば、「新人類」がもてはやされていた時期であることを考えると、一部を除いて、千葉大生はそのような流行にはあまり影響されていないようである。また、千葉大生のイメージは、実態よりもさらに地味であるといえる。

しかし気にかかる点も多い。まず、学生間の人間関係の希薄さがある。クラスメイトとの交流欲求も、先輩 後輩関係も、深いものとは言えないようである。大学時代にできた友人は一生つき合っていけるもの、という認識はもはや古くなってしまった

のか。親密な人間関係は、学生時代にこそ築かれるのではないだろうか。

また、今の政治に満足していないが、自分が政治に参加するのはいやだ、という「お客様」意識と、憲法改正には反対だが、憲法改正を党の綱領にかかげてきた自民党中心の政治が変わるのもいやだ、という「保守」意識、このような千葉大生の政治意識にも大きな問題がある。現在の日本の繁栄は、民主主義が機能しているからであり、学生のこのような態度は結果的には彼らが享受している「豊かな社会」を葬り去ってしまうのではないかと危惧される。

最後に、大学祭のパンフレットの変化は、現代の若者の変化を如実にあらわしている。最初の文字だらけの硬いテーマアピールから文字が減り、代わってイラストが増えてくる。言葉からイメージへ、論理から感性への変化である。また同時にマンガで内容を紹介するという「遊戯性」も見逃せない。しかし、大学は学問の府であり、論理が重要視される。学生の文字離れと読書量の減少は非常に重大な問題であるといえよう。

表1 5 3 a 『大学生生活実態調査』のサンプル数(上段)と比率(下段、単位：%)

回数	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
年	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
総数	287	273	254	277	266	277	238	198	247	225	267	203	265
自宅 生	161	153	152	185	166	163	150	112	117	118	122	99	138
	56.1	56.0	59.8	66.8	62.4	58.8	63.0	56.6	47.4	52.4	45.7	48.8	52.1
自宅 外生	126	120	102	92	100	113	88	86	130	107	145	104	127
	43.9	44.0	40.2	33.2	37.6	40.8	37.0	43.4	52.6	47.6	54.3	51.2	47.9
1・2 年生	177	160	137	157	121	159	121	106	122	122	149	110	160
	61.7	58.6	53.9	56.7	45.5	57.4	50.8	53.5	49.4	54.2	55.8	54.2	60.4
3・4 年生	110	113	117	120	145	118	117	92	125	103	118	93	105
	38.3	41.4	46.1	43.3	54.5	42.6	49.2	46.5	50.6	45.8	44.2	45.8	39.6
文系	139	132	138	140	127	139	118	104	110	111	139	100	85
	48.4	48.4	54.3	50.5	47.7	50.2	49.6	52.5	44.5	49.3	52.1	49.3	32.1
理系	148	141	116	137	139	138	120	94	137	114	128	103	180
	51.6	51.6	45.7	49.5	52.3	49.8	50.4	47.5	55.5	50.7	47.9	50.7	67.9
男性	206	177	162	180	174	183	157	127	164	125	162	114	156
	71.8	64.8	63.8	65.0	65.4	66.1	66.0	64.1	66.4	55.6	60.7	56.2	58.9
女性	81	96	92	97	92	94	81	71	83	100	105	88	109
	28.2	35.2	36.2	35.0	34.6	33.9	34.0	35.9	33.6	44.4	39.3	43.3	41.1

第3節 1980～1990年代の学生の意識

表1 5 3b 『千葉大生白書』のサンプル比率(単位: % 合計はサンプル数)

		1985年	1989年			1985年	1989年
学 年	1 年		41.1	学 部	文・法経	16.5	
	2 年	37.3	21.3		文		6.6
	3 年	43.2	31.7		法 経		14.6
	4 年	19.5	5.9		教 育	29.1	21.8
性 別	男 子	61.5	55.7		理	7.9	6.9
	女 子	38.5	44.3		医	14.7	2.0
現 浪 比	現 役	53.0			薬 学	2.1	4.7
	1 浪	47.0			看 護	2.7	11.5
サークル	体 育 系	23.8			工	18.4	22.3
	文 化 系	24.7			園 芸	6.8	9.7
	同 好 会	19.0			合 計	931	941
	教 育 系	3.2					
	そ の 他	2.4					
	非 入 部	23.6					

この章で用いた資料は以下のとおりである。

- ・千葉大学生協同組合『学生生活実態調査』(第18～30回、1982～1994年)
- ・千葉大学教育学部教育社会学研究室『千葉大生白書'85』(1986年)
- ・千葉大学教育学部教育社会学研究室『千葉大生白書'89』(1990年)
- ・庶務部、のちに総務部『千葉大学学報』(1979～1997年)
- ・学生部『学生生活のために』(1979～1998年)
- ・学生部『入学試験に関する調査』(1979～1996年)

なお、『学生生活実態調査』と『千葉大生白書』については、サンプル数とサンプル比率を表1 5 3 aと表1 5 3 bに示す。

図1 5 29 学部別学生像(1985年の『千葉大生白書』より)
薬学部と看護学部がないのは、サンプル数が少なく、学生像が描けなかったからであろう。

